収容所群島

1

ソルジェニーツィン　木村浩訳

収容所群島

1918－1956 文学的考察

ソルジェニーツィン
木村 浩訳

1

新潮社版

АРХИПЕЛАГ ГУЛАГ 1918～1956
ОПЫТ ХУДОЖЕСТВЕННОГО ИССЛЕДОВАНИЯ I-II
by A. СОЛЖЕНИЦЫН
World Copyright © 1973 by Alexander Solschenizyn
Japanese translation rights arranged through Linder AG, Zürich and Charles E. Tuttle Co., Inc. Tokyo

収容所群島 1

A・ソルジェニーツィン　木村 浩訳

印刷 1974. 12. 15　発行 1974. 12. 20
発行者 佐藤亮一
発行所 新潮社 東京都新宿区矢来町71／振替東京4－808／〒162
電話 業務部 (03)266－5111／編集部 (03)266－5411
定価980円
印刷所 錦明印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本株式会社
©1974, Shinchosha, Printed in Japan.
（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

献　辞

いのち足らずして
この真実を語れざりし
すべての人びとに――
わが見聞のいたらざるを
わが記憶のいたらざるを
わが洞察のいたらざるを
赦されんことを

私は胸に何か重苦しいものを感じながら、数年の間、すでに完成したこの書物の出版を思いとどまってきた。それはまだ生きている人たちに対する義務のほうが、死んでしまった人たちに対する義務よりも重かったからである。しかし、いずれにしても国家保安委員会がこの書物を押収してしまった今となっては、ただちにこの本の出版にふみきるほかに残された道はないのである。

一九七三年九月　　A・ソルジェニーツィン

この書物には虚構の人物も虚構の出来事も描かれていない。人物も場所もすべて実名で語られている。イニシアルを使った場合は、個人的な配慮によるものである。まったく名前が示されていない場合は、人間の記憶がそれらの名前を憶えておくことができなかったからにすぎない。だが、すべてはここに描かれているとおりであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一九四九年ごろ、私は友人たちと科学アカデミーの雑誌『自然』の誌上に注目すべき記事を見つけた。そこには小さな活字で次のようなことが書かれていた。コルイマ河の岸で発掘作業中、偶然、地下の氷層が発見された。それは凍結した大昔の流れであったが、その中からこれもやはり凍りついた数万年前の動物が発見された。その動物が魚だったかサンショウウオだったかはともかく、それがとても新鮮なまま氷づけになっていたため、記事を書いた学者の目撃したところによると、その場に居合せた人びとは氷を叩き割り、さっそくその場でそれらの動物を**よろこんで**食べてしまったという。

あまり数多いとはいえないこの雑誌の読者たちは、おそらく、氷の中では魚肉がなんと長持ちするものかと少なからず驚いたにちがいない。だが、不用意にも掲載されてしまったこの記事のもつきわめて意味深長な側面に気づくことのできた人は少ない。

私たちにはすぐわかった。その場面が微細な点に至るまでありありと念頭に浮んできた——その場に居合せた人びとがどんなに慌てふためいて氷を叩き割り、崇高な魚類学的興味などには目もくれず、互いに肘で仲間を押しのけながら、何万年前の肉の氷づけをちぎり取って、焚火のところへ引きずっていき、氷を融かし、がつがつと腹に詰め込んだか、が。

なぜわかったかといえば、私たち自身も**その場に居合せた人びと**と同類の、強大な囚人族の一員だったからである。この地上で、サンショウウオを**よろこんで**食べることができる唯一の種族は囚人(ゼック)だけである。

コルイマは《収容所(グラーグ)》という驚くべき国の最も大きく最も名高い島であり、苛酷(かこく)の極地ともいうべき場所であった。この国は地理的に見れば群島の形で散らばっていたが、心理的には一つに合わさって大陸をなしていた。ほとんど目に見えず、ほとんど触れることのできない、大勢の囚人たちの住む国であった。

この《群島》は国じゅうのあちこちに入り組んで点在し、都市の中に入り込んだり、通りの上におおいかぶさったりしていた。それにもかかわらず、まったくそれに気づかぬ人びともいた。いや、漠然と何か耳にしていた人びとはかなり多くいたのだが、その実情はそこにいたことのある人びとにしかわからなかったのである。

しかもそういう人びとまでが、まるで《群島》の島々で言語能力を失ってしまったかのように、ずっと沈黙をまもってきた。

わが国の歴史が思いがけぬ方向転換をしたために、この《群島》の事情が何やかやほんの僅かながら明るみに出た。ところが、われわれの手錠のねじを締めあげたその同じ手が、今度は取りなすような制止の手つきをしているのだ。「いけませんよ！　過去をほじくり返したりするなんて！……《昔のことを憶えている者は、片目が飛び出す！》っていうじゃありませんか」ところが、この諺(ことわざ)はその先をこう結んでいるのである――《忘れる

者は、両目とも！》

歳月が流れていき、過去の切り傷やただれを永久に舐め浄めていく。その間にある島々はぐらりと揺れて、地すべりが起き、今は忘却の北氷洋のかなたに没してしまったものもある。やがて来世紀のいつか、氷層に閉ざされたこの《群島》、そこの空気、住人たちの骨があらわれ、例のサンショウウオのように後世の人びとからうさんくさく扱われるであろう。

私はこの《群島》の歴史を書こうとするほど厚かましくはない。というのも、《群島》の記録を読む機会に恵まれなかったからである。しかし、そんな機会に恵まれる人がこれから先あるだろうか？……**思い起すこと**を望まない人びとにはすべての記録をきれいさっぱり抹殺する時間がこれまでにも十分あったし、これからもあるだろう。

私はそこで過した十一年間を恥だとも呪わしい悪夢だとも思わず、かえって自分の血とし肉とした。いや、それどころか、私はあの醜い世界をほとんど愛さんばかりであった。そして今や、幸せなめぐり合せによって、《群島》の新しい話や手紙がたくさん私のもとに寄せられている。だから私はそうした骨や肉をいくらか提供できるかもしれない。もっとも、それは例の発掘の時のとは違って、まだ生きている肉、今日もまだ生きているサンショウウオであるが。

この書物を創るのはひとりの人間の手にあまることであった。私が自分の目と耳を働かせ、自分の皮膚と記憶に焼きつけて、《群島》から持ち出せるだけ持ち出したもののほかに、

総計二二七人

に及ぶ人びとが、その物語や回想や手紙の形で、この書物の資料となるものを、提供してくれたのである。

私はそれらの人びとに対して、ここで私個人の謝意を表することはしない。それはこの書物が迫害され責め殺されたすべての人びとのためにわれわれが一致協力してうち建てた鎮魂の碑であるからである。

私はこれらの協力者たちのなかでも、特に、現在図書館にある蔵書や、とうの昔に絶版や解版され、その一冊でも捜し出すのに大きな忍耐を要した書物の中から、この著述に文献的裏付けとなるものを与えるべく私のために労苦を惜しまれなかった人びと、さらにまた、追及のきびしい時期にあってこの書物の原稿を秘かに保存し、その後それをコピーし

てくれた人びとの名を改めて特記したい気持でいっぱいである。

しかしながら、私がそれらの人びとの名をあえて公表する時機はまだ訪れていない。

ソロフキ島の主ともいうべきドミートリイ・ペトローヴィチ・ヴィトコフスキーはこの書物の編者になるはずであった。だが、彼は**あそこ**で過した半生の見返りに、（彼の収容所生活の回想録はずばり『半生』と題されている）年の割には早すぎる中風にかかった。もう口のきけなくなった彼が通読できたのは、すでに完成していた数章にすぎなかったが、彼はあらゆることが**語られるにちがいない**という確信をいだいてくれた。

これからも長いことわが国に自由の光が射しこまず、この書物の受け渡しがきわめて危険だということになるなら、私は未来の読者に対しても、亡くなった人びとに代って、感謝をこめた挨拶を送らなくてはならない。

一九五八年に私がこの書物の執筆に取りかかった時、私は収容所に関する回想録とか文学作品とかのあることをまったく知らなかった。一九六七年までの長年にわたる執筆活動の間に、ヴァルラム・シャラーモフの『コルイマ物語』とか、D・ヴィトコフスキー、E・ギンズブルグ、O・アダーモワ＝スリオズベルグなどの回想録を私は次々に知るようになったが、それらは私が叙述を進めていく過程で、万人周知の文学的事実として（結局のところ、そうなることは間違いない！）引用させていただくことにした。

その意図とは裏腹に、いや、その意志に反して、この書物のために貴重な資料を与えてくれ、たくさんの重要な事実や数字、はては《群島》で暮した人びとの呼吸していた空気

に至るまで保存しておいてくれたのは、M・I・スドラプス＝ラツィス、多年にわたり検事総長をつとめたN・V・クルイレンコ、そのあとを継いだA・Y・ヴィシンスキーとその共犯者の法律家連中であるが、そのなかでも特にI・L・アヴェルバッハの名を逸するわけにはいかない。

この書物の資料はまた、ロシア文学においてはじめて奴隷労働を讃美した《白海運河（ベロモルカナル）》に関するあの恥ずべき本の著者たるマクシム・ゴーリキーを筆頭とする三十六人のソビエト作家たちからも提供してもらった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

収容所群島1・目次

第一部　牢獄産業

第一章　逮捕　17
第二章　わが下水道の歴史　37
第三章　審理　100
第四章　秘密警察　146
第五章　初監房——初恋　178
第六章　その年の春　230
第七章　機関室のなかで　269
第八章　幼児期の法　289
第九章　法は成人する　327
第十章　法は成熟する　360
第十一章　死刑　416
第十二章　禁錮　438

第二部　永久運動

第一章　群島の船　467
第二章　群島の港　507
第三章　奴隷キャラバン　539
第四章　島から島へ　560

＊

訳者あとがき　586
付録　巻末

＊第一部第九章以後は第2巻に収録

凡　例

一、日本語版においてはロシア語原書の大文字だけによる語句の表記はゴシック活字で組み、イタリック体によるものは訳文の右側に傍点をつけて区別した。ただし、機関名などの略称の場合はこの限りではない。

二、原書における著者脚注は、各語句の右下に番号を付し、各章末に一括して掲載した。最少限にとどめた本文中の割注はすべて訳者によるものである。

三、会話、引用は「……」で示し、新聞、雑誌名は『……』を用いたが、そのほか場合によって《……》〈……〉を使用した。なお、文中の感嘆符（！!!!!）はすべて原文通りである。

收容所群島 1

——1918～1956 文学的考察——

装画＝香月泰男「黒い太陽」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com